

山陽特殊製鋼株式会社  
2017 年度決算説明会  
主な質疑応答（要旨）

開催日 2018 年 5 月 18 日（金）  
説明者 代表取締役社長 樋口 眞哉

---

**Q. 電極価格については、普通鋼電炉メーカーの中には 2018 年度下期にもう一段の値上げを織り込んで業績予想をたてている会社もある。当社では 2018 年度業績予想にどのように織り込んでいるか。**

A. 電極価格は昨年度対比約 3 倍の水準で織り込んでいる。今年度から、価格に関しては半年契約となった。今のニードルコークスの価格が続けば、2018 年度下期に 2~3 割というレベルの値上げはありうるとみている。

2018 年度業績を予想した時点では、そのあたりがまだよくみえていなかったもので、2018 年度下期の電極価格は上期の横ばいと置いたが、他に保守的な前提を置いている所もあり、全体としては大きな影響にならないと見ている。

**Q. 子会社化予定のインドのマヒンドラ山陽は、これまでの決算では利益は出ていない。のれんの償却等は業績予想に織り込んでいないとのことだが、利益面ではどう織り込んでいるか。また、将来的にはどれくらい期待しているのか。**

A. マヒンドラ山陽の子会社化は 2018 年 6 月末を目途としており、同社は第 2 四半期からの連結予定。マヒンドラ山陽の 2018 年度通期利益は黒字とみているが、海外子会社は 3 か月ずれて連結されるため、改善が見込まれる 2019 年 1-3 月期の損益が 2018 年度の連結決算には反映されない。従って、利益面の影響はほぼゼロとみている。

将来的には、インドの特殊鋼需要の増加が見込めるので、生産能力を上げて、利益をより伸ばしていきたいと考えている

**Q. 新日鐵住金による当社子会社化において、品種・生産の集約についてどう考えているか。**

A. 独占禁止法の審査があるので、具体策はまだ決まっていない。当社と新日鐵住金ではそれぞれ得意な品種が違う。例えば、当社は軸受鋼が得意だが、新日鐵住金は炭素鋼等が得意なので、品種の集約を行えばメリットは期待できると考えている。顧客の受け止めは、基本的にはポジティブだと思っているが、必要な認定を個別に取得していく必要がある。

**Q. 鉄スクラップ以外のコスト上昇に対して、値上げをどれ位織り込んでいるか。**

A. 電極等の価格上昇に対し、5 千円/トンの販売価格値上げをユーザーにお願いしているところがある。大手メーカーを含め、既にご理解いただいたところもあるし、交渉中のところもある。

**Q. 電極価格上昇に関し、他社ではサーチャージの導入の動きもあるが、当社はどう考えているか。**

A. 電極サーチャージは米国、欧州ではあると聞くが、先ほど申し上げた通り、電極等の価格上昇に対して5千円／トンの販売価格値上げをユーザーにお願いしているところであり、電極サーチャージの導入は今のところ考えていない。

今回の電極価格上昇は、中国での地条鋼廃止に端を発した構造的なものであり、水準訂正をした後は、鉄スクラップ価格のように大きくは変動しないと思っているので、個別の交渉に委ねることとした。

**Q. 新日鐵住金による当社子会社化に関し、Ovako 社との3社連携も視野に入れているとのことだが、Ovako 社とはどういう相乗効果があるのか。**

A. Ovako 社と当社は、軸受鋼、工具鋼など生產品種が似ており技術的なシナジーはあると考えており、販売エリアは、当社はアジア中心、Ovako 社は欧州中心と異なる。独占禁止法の審査があるので、具体的なストラクチャーはまだ決まっていない。

**Q. 第10次中期経営計画における生産構造改革の進捗状況について教えていただきたい。**

A. 当社には、第一工場と第二工場がある。主力工場である第二工場のボトルネック解消のための投資を既に決定し、設備の発注・製作を進めているところである。年末年始と夏季休暇の間に工事を行い、再来年の春頃から生産能力が出てくると思う。

第一工場の方は、かなり大仕掛けな改造が必要なので、今、どのようにするか、検討して詰めているところである。時期は次の中期にずれ込む可能性はあるが、きちんと詰めて、競争力のある構造にしたいと考えている。

以上

本資料に記載された将来の予測等は、説明会の時点で入手可能な情報に基づいたもので、今後様々な要因によって異なる結果となる可能性があります。いかなる確約や保証を行うものではありません。